

【佳作】

## 「日本とロシアに必要なもの」

七飯町立七飯中学校

3年 庄司 凧

二月七日。この日は「北方領土の日」だ。この日を知らなかった僕が、北方領土に興味を持ったのは中学二年の時だった。雪の降る日に元島民二世の方からお話を伺った。故郷に帰ることができず、残してきたお墓にお参りすらできない切なさを知った。根室の海に浮かぶ北方領土の雪景色が見えたように感じた。

外務省のホームページを見ると「北方領土は日本固有の領土である」と書かれていた。アメリカもこのことを認めている。しかし、日本とロシアはいまだ、平和条約も結べていないために、日本とロシアの間では国境が定められていない。

どうすれば良いのか考えたとき、「ジョバンニの島」の一場面が浮かんだ。大事なのが「共存」という言葉なのだと思った。共存することは、二つの国双方にとってメリットがある。日本側のメリットの一つは漁業の範囲が拡大することだ。資源を確保できることだと言い換えてもいいだろう。ロシア側のメリットは技術を日本から輸入できることだ。資源の生かし方を手に入れることができる。二つのメリットは一致している。二つの国の良さが発揮できて、貿易の拡大も望めるだろう。

そうすれば、日本とロシアの島民の方たちが救われる。ロシアに占領され尽くす前の一時、北方領土に訪れた「平等」な共存が再現される。純平とターニャの笑顔が現実になるのだ。

僕が住んでいるのは七飯町だ。七飯町は、「西洋農業発祥の地」と呼ばれる。イギリスから来たガルトネルという人物が、西洋種農作物の栽培を行ったことが、当町農業の契機となり、その後、日本各地へと西洋農業を広める礎を作ったからだ。

建造物も多く建てられ、さながら異国のような風景であると、当時の七飯を旅行したイギリス女性イザベラ・バートも日誌に記したその当時の七飯の写真を僕は何度も目にした。だから、二つの国の文化が一つの場所で共存する姿を僕ははっきりと想像することができる。それは、豊かさと笑顔に満ちた情景だ。

それを妨げるのは、両国の「不安」だ。技術を奪われるだけで終わるのではないかという不安と自分たちの住む場所がなくなってしまうかもしれないという不安。お互いに動けなくなっているのが今の状況だろう。だからこそ、日本国民とロシア国民全員が、自分たち自身の問題として北方領土問題について考えることが必要だ。お互いの国について理解し合ったとき、日本とロシアはとても強い協力関係を築くだろう。

二つの国の文化が結びついたことによる豊かさを証明した地、西洋農業発祥の地としての七飯に住む僕は、これからも「共存」を強く訴えたい。たくさんの人にその豊かさと必要性を伝えたい。どちらの国にも不満がない平等な地になったとき、北方領土は二つの国の架け橋となるのだ。